

第 5 回遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会 (議事概要)

- 1 日 時：平成 19 年 7 月 3 日 (火) 10:00~12:10
- 2 場 所：農林水産技術会議委員室
- 3 出席者：別紙参照
- 4 議事概要：

事務局から配布資料「中間取りまとめに向けた主要論点整理 (案)」の説明が行われました。出席者からの主な発言は以下のとおりでした。

(1) 遺伝子組換えを巡る現状

- ・ 遺伝子組換え技術の位置付けに関する記述は重要。農業技術の中に育種技術があり、遺伝子組換え技術は育種技術の中で使われるもの。
- ・ 品種改良に用いることによって、食生活に広範囲なメリットがあることを示すべき。
- ・ 遺伝子組換え農作物が人の健康や環境に及ぼす潜在的な影響の可能性に対しては、安全性評価の世界共通のルールがあるから大丈夫というより、具体的に内容を示し、環境、食品等に対する影響評価が実施されていることに言及してはどうか。
- ・ 米国、EU 等外国における研究戦略に関する情報は、我々の研究戦略の選択判断に有用ではないか。
- ・ 遺伝子組換え農作物等の開発においては、アジアが日本のパートナーになる可能性は高い。競争相手だけでなくパートナーについても示してはどうか。

(2) 研究開発における課題と推進方向

- ・ 我が国がイネゲノム情報の解読成果を活かしきれていないことについて、どのように遺伝子組換え技術に活用していくかを説明する必要。
- ・ 遺伝子組換え農作物の実用化は、安全・安心をどのように確保するかが今後ますます重要。様々な形質をイネで発現させるアイデアがあるが、交雑防止技術の開発は重要。

(3) 具体的プロセスと研究システム改革

- ・ 農業技術は、工学や理学分野の技術と比べて遅れているイメージだが、実際はそうではないということが世界の情勢から分かってきた。しかし、遺伝子組換えは役立つ技術であるが実用化には遠く、研究者にとっては、その先に開けるものがあるかどうか研究に取り組む鍵である。知的集団を活かす道を開く役割が必要。
- ・ 司令塔機能の強化について、戦略的な方針を併せて示す必要。また、研究者が作物開発するために必要なサポートについては、人材確保等実効ある具体的なものを考えるべき。

- 国内だけでなく、アジアも技術を求めている。パートナーとして連携に組み込むべきではないか。
- イネが奨励品種になるには時間がかかり、地域で実証されたものがその地域の品種になる。リーダーシップは、都道府県を含めた栽培現場まで考えに入れる必要がある。

(4) 国民理解

- 以前から遺伝子組換えに反対している人たちのうち、反対し続ける人は反対し続けているが、一方で徐々に遺伝子組換え技術に対して理解が浸透しているのも事実。丁寧な説明を時間をかけてやる方が信頼される。
- 理解することと安心することは異なる。頭で理解していても肝心な部分で分かっていないという現実もあるので、このことに留意すべき。
- 国民理解は、消費者だけでなく農業生産者にも向けることを方向性として打ち出した方がよい。

(別紙) 委員の構成

(五十音順、敬称略)

有田 芳子 主婦連合会環境部長

石井 茂孝 キッコーマン株式会社顧問
(財)野田産業科学研究所副理事長兼専務理事

内宮 博文 東京大学分子細胞生物学研究所教授
(財)岩手生物工学研究センター所長

貝沼 圭二 農林水産技術会議委員
元 国際農業研究協議グループ(CGIAR)科学理事会理事

小池 一平 全国農業協同組合連合会営農総合対策部長

篠崎 一雄 (独)理化学研究所植物科学研究センター長

武田 和義 岡山大学資源生物科学研究所所長
日本学術会議会員

田畑 哲之 (財)かずさDNA研究所副所長

廣塚 元彦 不二製油株式会社研究開発本部フードサイエンス研究所所長

三石 誠司 宮城大学食産業学部教授

山本 和子 フリージャーナリスト
(有)農業マーケティング研究所所長